

佐伯と岡本田独歩(山)

賛助会員 山内武 麒

(佐伯古城下西町)

十七日 (注一) 明治二十六年十一月

月明かなり

昨日午後後収二と共に城山に登る。これより先き十日午後後学校生等と共に登る。城山の頂に城跡あり。城跡は石垣を残すのみ。残墟累々秋草と灌木と蔓草と松風と紅葉と相交錯紛々たるを見る也。自然は人間の歴史を顧みざる也。分れ良只かなさんと欲するままに為すなり。人間は其間に生死浮沈するなり。

今日午後又夫収二と共に城山に登り草木植物を採取す。

昨日収二より藤形夫婦に關する話、及山縣夫婦に關する話、又神田の老母及其嫁に關する話を聞く。事実。嗚呼此の事実を如何せん。

天の星、月、雲、光、地の草、木、花、石、風、人間の歴史、生活、性質、境遇、關係、情、生死、怨、恨、恋、不幸災厄、幸運榮達。

ア、此事實、彼の事實、人は只此錯紛混雜せる事實の裡に、盲目的に起居するに過ぎざる可きか。

自然！宇宙、固より不思議なり。人間、嗚呼人間に至りては更に不思議に非ざる乎。彼は自然の法則に支配せられつつあるなり。而して不思議なるは其生活、運命、及びドラマなり。

城山に登り、山上の城跡はた石垣のみを残すのを見る。そしてそこには秋草、灌木、蔓草が生い茂り、波る秋風に簌々とした気分になる。自然はありのままの姿で存在し、人間の歴史には全く無関心である。人はその自然の中に生まれ、死に、浮き沈みするものである。収二は希望の逆所の人や知恵の人の噂話を聞き、人間はこの辛辣な現実の中に生きていくのだと、つらつら思っている。

二十日

二十日と称すと雖も巳下十二時迄半の鐘は打ちぬ。吾令坐して此記を書き可し。窓外に月光將に寂寥をたすけつゝあるなり。

十八日は土曜日をりき。午後二時過ぎ、学校より降りて弟を伴ひ直ちに尺間山に向て登す。固より前以て計画し置きたりし也。

天気は近頃好日の又打続き秋空、白雲紅葉、夕陽の美は連日益々其美を表はす。此日又た好天気。尺間山に登る二道あり。一は床木村より急坂直ちに攀がる者、一は愛宕社の後より山脈をひとふ者。吾輩先きに床木より登りしを以て此度は山脈の道をとる。尺間の頂に至らぬや己は日暮れ、天光夜と共に蒼みて深く遠く相成り、月色冷やかに照しはじぬ。夕陽の美を山脈の頂を道すがら眺めて真に自然の一なるを感ず。未だ母たるを感ずる能はず。

山頂に人を宿する者、三、三個あり勿論不す其れたる  
茅屋なれども尺間神社の信者は之に籠るなり。吾等  
兄弟又た其の一に宿る。宿は一眠を失ふたる女あり  
三十五六歳許り、他に十三四の小女あり、只だ此の  
二人のみ。吾等爐辺に坐し熾々燃え上る火に對して  
むすびを食う。

月を巖頭に眺む。望んで極まる処を知らず。下界  
只だ見る朦朧たり。而して天上明光のありあり。衆  
只だ自然の中に在るを感ず。

二度目の尺間登山の記である。前から計画してあって、  
十八日の土曜日の午後おそく弟と共に出發した。この  
純好の登山日和であつた。前は床木から登つたので、今  
度は植松の廣宮神社の裏から登つた。尾根伝いに登り、  
途中で日が暮れかかる。尾根から見ただ陽はどんなに美  
しかつたであるうか。だんだん月は湧えて来て、月光を  
たよりに頂上へ登る。

山頂の宿に着く。宿は一眠を失つた三十五六歳の婦  
人と、十三、四歳の少女がいた。爐辺で火を囲み、持参し  
たむすびを食へた。

夕飯を終えると外に出て、月を切り立つた岩の上を眺  
める。下界は朦朧としてうす暗いが、天は明るい月が  
輝いている。この絶景に心を打たれ、自分自身は自然の  
中に只だ在ることを感じた。

二十一日

（前鬼一昨夜の記の続き）

其の夜は此の茅屋に眠る。かかる家に眠りたるは  
これが始めなり。

此の家は、其命運、其迷信、之れ吾に取つて大  
なる事案なり。小女は又た尺間社に籠るため送ら

て在る者の由。

十九日早朝、日の海面より上ぼるを見る。其の美  
未だ見ざる処の者なり。

武石氏と三人、此日考岳にめぐり、一日を山より  
山の跋涉に暮らしぬ。霞ヶ浦に下りて帰宅す。

一ノ鳥居の一軒屋、其住人、此の事案は面白き意  
味を含む。

自然・生活の實際、之れ吾が深く観んと致す処の  
者なり。事案なる哉。見よ人生の事案を見よ。天の  
下は地の上は人間が暮らしつゝ在る實際の事案を見  
よ。而して自然を見よ。

昨日の記の続きである。十八日の夜に入つて尺間山頂  
に着いた独歩兄弟は、その晩宿に泊つた。宿は勿論茅ぶ  
きの粗末な家である。こんな家に寝たのは初めてであつ  
た。この家の一眠を失つた女主人のことを色々想像す  
る。また一しよに居た少女は、尺間神社にお籠りに送ら  
れて来て泊つていた。この少女のことも考へる。

翌十九日の朝まだき、朝の日の出を見た。太陽がか  
た太平洋の海面から昇ってくる壮大な景色に心を奪われ  
た。こんな美しさは今まで一度も見ることがないと記し  
てある。

その日は、武石氏と三人で、山から山を越え、谷から  
谷を涉つて、どうとう考岳へ登つてゐる。津久見に降り  
て考岳に登つたのか、床木に降り、坂を越して八幡へ出  
て、海崎一戸穴へ通つて宇戸の奥から登つたのか、は  
つきり解らない。或いは山の尾根伝いに歩いて登つたのか  
も知らない。一日中山から山へと跋涉して暮らしたと記  
してある。

そして霞ヶ浦に下りて海岸沿いに歩き、海崎の坂を越  
して坂の浦へ、また田の浦坂を越して田の浦へ出て、帰

究じたのである。独歩兄弟は驚くほど健康であった。それにしてもよく歩いたものだと思ふ。この行程は少なくて七、八里、或いは十とあると思われ。しかもその道が山坂越して高い山に登つたのである。今かように行き帰りにバスの利用も出来なかつた。當時は馬車もなかつたので、みな歩いて歩く歩いたのだ。当時の独歩の杖策は、いであちは、木綿袴に編上靴を履き、ステッキを持っていたといふ。小男であるから、ちよこちよここと足早に歩いていったものだ。

独歩は新標に閉き、おれは杖策して歩いたが、山野の美に耽溺しなかつた。自費の景色、人の生活を見たり聞いたものの中に存する詩情を汲み取るうと心を砕いていた。

武石氏とは武石素吉氏のことである。当時堂館の生徒であった。この人は軍医となり、この大手術で医院を創業した。

二十六日

(前畧)

一夜夜の宵、弟と共に海岸迄で月を賞してゆきたり。

家を出て櫓の堤をたどりて港道に出でて、終に波止場の鼻に立つ。磯はさざめく小波の、月にてりゆるやかに又美し。かり捨てし小舟の縁に月光の落ちたるあり。嶋々の影黒く海面に映じて、其の暗き迎へ波、光にくまけて錦の漂ふに似たり。

港道の左は山、右は水田なり。山の麓、をりなり農家あり。其のうつら、月の光をたよりて庭の隅に湯あみなす雪を見たり。

水田なき川岸と海辺とに三四塩たぐ小屋あり。其の屋根のどがかりたる影より、白煙少しばかり。月をうけて静かに立ち昇るを見たり。すべて寂寥たる景色なりけり。

港道と櫓の堤との間に一村あり。家数も十四五に充たぬなるべし。其の一つ、水のはとりに建つ家は船大工なり。近頃造りかけの船、山の根に横たへあり、新木の香に月の光しゆめて、あたり人なく、懐しき音なりし。一軒の例の鍛錬工の槌の音、ふいこの声、あいかわらず響き居たり。昼間見ると小供等は見え、家々静分なりけり。

不曜日二十三日の夜は月の光、夕の香をこめて僅かに照りせぬし頃、たまらず、家を出てぬ。弟と伴ひたり。

船頭河津に出でたり。昼間のさわかしきに似すいと静かなり。白馬一つ繫が居るを見たり。忽ち馬子来りて、舟で石階を下り渡船に乗らんとす。馬をそれてのらす。二三の人船と岸とに立ちて危ぶみて眺めぬ。馬よふり、船に乗りたり。月己に川にぬち居たりし也。海岸の石階の上は理髪所あり燈かがやき居たり。其の前は四五人の見守り集りて、頻りに小兒を揺りつづめ居たり。声ははれなりき。渡船河中流に出でし時、斜めに下流の宿より射す月の光を受け、馬白く人黒く舟危く、古色ありて、余眼前に眺め、懐古の情と等しく一種の哀れを感じぬ。かかると時々々々笑ふ声、静けさを破りて聞ゆるなど、是れ却って哀れを増す者なり。船廻りし時、吾等も乗りて渡りぬ。曩の洪水に流されし橋の杭のこり立ちて趣きそへぬ。

「渡」を渡れば陸田路なり。水田と河の入江とを貫

きたる真すべの道にして寂なし。此処野辺甚だ開けて山々のふもとを去るや、遠く、蒼煙はるかに地上をこめ月光白く空にみち、人なく声なく、山黙々、田の面にくぐし火燃へ居たり。只だ独り静かにもへ居たり煙低くはひて月の光これにこもりて蒼く甚だ寂寥をたすけぬ。一首を得たり。

冬枯れの野辺にまなく燃ゆる火の煙は月の光ならまし。

昨夜友にやる書状認め了はりし時は夜已に甚だ更けぬ、月の光のみ醒めたり。声あり、口笛あり。何処の少年ぞ、可憐なる。

一昨日二十四日の宵から月を眺めながら、葛港まで散歩した。家を出て樋の堤道を友とたつたところから、白坪道である。山際道と養賢寺の前から白坪川の川沿いを行って蟹田に通ずる道は、堤道で樋の並木があった。この道を歩いて朋神様の前から蟹田に出ると、港に通ずる新道に合した。

蟹田を過ぎると今の通ではなく、山際に沿って平野を通る。平野から田の浦、そして葛へと行くのであった。私は少年の頃葛に住んでいたため、この道は小学校時代、中學校時代に毎日通ったなつかしい通降道である。佐伯駅が出来て、蟹田から田の浦へ通ずる今の道路が出来たのである。

港では波止場の鼻に立って、独歩は月に映える海を眺めて楽しんだ。この波止場は今も葛の海辺にその名残りを止めている。石を築いて造った短い突堤である。

港に出る新道は左に山があり、右側は昔は水田が振付いていた。山の麓は農家と見えるとおるが、平野から田の浦である。今の駅前が昔日殆んど水田で、駅前を過ぎて今の町の北西付近から港の岸辺までには広い塩田があった。

た。そして葛から野岡山の前の川口まで一直線に長い石垣が築かれて土堤を作り、その内側はすつと塩田であった。海岸と川岸に沿うて三四軒づつ塩焚く家があった。塩焚釜のある小屋からは白煙が立ち昇っていた。

港道と樋の堤との間の一村と蟹田のことである。この川辺に船大工が船を造っていた。漁船などの小さい船であった。また、この蟹田にはかじやがあり、桶屋もあった。

独歩は、この葛港に行った前の晩の二十三日の夜も、月が照り初めると、じつと家に居ることが出来ずに、弟を連れて独歩に出ている。船頭所の川岸に行く。昼間は浦まへの渡海船が集って騒がしいが、夜は静かである。先日の大じけの洪水で池船橋が流されて、向う岸まで渡し舟が通っている。白馬を向う岸まで渡し舟で渡そうと、人々が色々気を探っている。

漸く乗せて舟を出す。川の中流に出たとき、月に照らされた馬、人、舟の姿を見て哀れさを感じた。川岸近くの理髪店、その前で唄って子供を寝かせている子守娘たち、昔の船頭所の川辺の情景が憶はれる。

舟がまた帰ってくると、自分たちも又都に渡してもらって堅田道を歩く。また今のような池船の所並は無かつたので、広い野辺が山の裾まで広く開けて、いす煙がたつこめた月空に一人一人通らず静寂そのものであった。田の面に一か所所屑焼く火だけが静かに月の光のもとで、白煙を出して燃えている。短歌が一首浮かんだ。

晩秋の月光に輝く野らの風情を、よく表現してある。(この項おわり)

(行記)

引用の歌が「行記」は「国木田独歩全集」の原文のまま、従って解説法は旧集の使用、送り仮名、仮名遣いなど旧のままとしている。(編集者)